OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本の合唱史における「幻の東京オリンピック」：その意義と位置づけをめぐって
Author(s)	山口, 篤子
Citation	待兼山論叢. 美学篇. 2005, 39, p. 27-49
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12729
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本の合唱史における「幻の東京オリンピック」

――その意義と位置づけをめぐって[1]――

山口篤子

はじめに

幻の東京オリンピック――一九四〇（昭和十五）年に開催されるはずだった、第十二回オリンピック東京大会のことである。一九四〇年が皇紀二六〇〇年という節目の年にあたっていたため、さまざまな祝賀行事が早くから計画され、東京オリンピックもその一環として構想されたものであった。この東京大会に関しては、中村哲夫[2]や橋本一夫[3]などによって詳細な研究がなされているが、本論では、これらの研究では扱われていない東京オリンピックと音楽界のかかわりを、特に合唱運動に着目してみてみたい。

東京オリンピックの開催が決定されると、合唱、それも万単位の大規模なものが大会で用いられるべき音楽として注目を集めたので、大合唱団結成の動きが起こり、合唱運動の組織化が始まった。しかし、日本の合唱運動に関する記述の大部分を占める合唱関係者たちの回想には、そのことはほとんど出てこない。昭和戦前期に合唱運動に

携わった人々が話題にするのは、一九二七（昭和二）年に開始された合唱コンクール「合唱競演会」[4]と戦時期に提唱された「国民皆唱運動」[5]ばかりで、オリンピックについては、合唱運動へ及ぼした影響の大きさにもかかわらず、彼らは意識的に口をつぐんでいるようにすら思える。[6]

東京オリンピックを契機とする合唱運動の組織化については、すでに細川周平が、集団としての合唱活動がもつ政治性という側面から概要を述べている。[7]その政治性ゆえに合唱界は分裂を繰り返したため、合唱関係者たちにとって一連の出来事はあまり思い出したくないものなのかもしれない。しかし、当時の状況と合唱関係者たちの発言とを重ねあわせてみると、東京オリンピックは合唱運動にとってマイナスにばかり働いたのではなく、後の合唱運動の展開に鑑みれば、むしろ重要な転換点だったと言える。

一　組織化される合唱運動

オリンピックで必要とされる音楽

東京オリンピックの開催が決定されたのは、一九三六（昭和十一）年七月三十一日。その翌日の八月一日には、第十一回オリンピックベルリン大会が開会した。細川周平によれば、オリンピックに関する記事が音楽雑誌に見出されるのは、このベルリン大会以降である。[8]当時のオリンピックには、古代のそれにならってスポーツ競技とともに芸術競技が設けられており、日本はベルリン大会ではじめて芸術競技に参加した。音楽部門では作曲コンクールが行なわれることになっていたので、前年から国内選考が進められ、雑誌にはその模様を伝える記事が散見される。その中には、東京へのオリンピック招致が決定しないうちからその構想とからめて「此次は会場を東京へ持つて来

るといふ話もある時、新興音楽の如き文化分野で日本の力量を示す事は最も意義ある前哨戦と云へる」[9]と意気込みを語る談話もあった。

この談話を発表したのは、大日本体育芸術協会[10]の理事として国内選考に携わった作曲家・諸井三郎である。彼はベルリンでの審査にも日本からの審査員として参加した。その帰国を待って、雑誌『音楽評論』は作曲家や音楽評論家など九人を招いて諸井の話を聞く「オリンピック音楽座談会」を催した[11]。その席で諸井は、ベルリン大会の音楽をおおまかに四つに分けている。すなわち、(一)競技場で演奏された音楽（芸術競技を含む）、(二)野外舞台で行われた、ヘンデルのオラトリオ《ヘラクレス》やベートーヴェンの《第九》の公演、(三)芸術週間、(四)舞踊である。オリンピックに関連して開催された「芸術週間」の演奏会は「ドイツ音楽の宣伝」の場であったこと、芸術競技の作曲コンクールでは、ドイツからの応募作品四曲すべてが入賞したことなどが報告されると、出席者からはドイツ音楽の力量とそれに対する自信の強さにあらためて驚きの声が上がった。また、開閉会式でのオーケストラや合唱団による演奏、そして競技中に行われた吹奏楽の演奏に対しては、その規模について質問が出た。諸井はおおよそと断りながら、オーケストラが二百人、吹奏楽団が五十人、合唱団が二千人と答えている。

実際にオリンピックを体験した諸井の話は、単なる土産話ではなく、東京大会のための参考資料としての意味を持っていた。というのも、皇紀二六〇〇年を祝う祝典でもある東京大会では、日本があらゆる点で世界的な水準を超えていることを世界に示さなければならないからである。オリンピック招致決定後、四年後に向けての計画に関する記事で「体面」という言葉がしばしば用いられていることが、当時の雰囲気をよく示していよう。

日本は西洋音楽の分野ではいまだ後進国であったが、東京大会を開催するからには四年間で最高の音楽を準備し

なければならない。そこで人々が目をつけたのが、過去のオリンピックにおける演奏人員の規模であった。大人数を動員するためには、器楽であればオーケストラよりも吹奏楽が、そして何よりも合唱が最適である。ベルリン大会では前述のように二千人、その前のロサンゼルス大会では千二百人の合唱がなされていた。こうして、日本でもオリンピックの音楽として、合唱が注目を集めるようになった。過去の大会を上回る規模の大合唱団の結成が計画され、合唱運動の組織化が始まるのである。

「大日本聯合合唱団」と「全日本合唱団聯盟」

最初に組織された大合唱団は、十二の合唱団体による「大日本聯合合唱団」である。結成は東京オリンピックの開催決定からひと月あまり経った九月九日のことで、日本演奏家聯盟[12]の提唱によるものであった。[13]結成時に発表された宣言文には、合唱団の目標がオリンピックであることは記されていないようだが、[14]「〝東京オリムピック〟に一万人を動員する大合唱団を組織しよう」[15]としていると一般紙が報じたように、オリンピックを目指していることは明らかであった。

この発表に驚いたのが、大日本音楽協会[16]と国民音楽協会[17]である。というのも、そのわずか二日前の九月七日、[18]日本放送協会が大合唱団の結成にむけて座談会を開催しており、これらふたつの団体はその席上で合唱運動の組織化の舵取りを委ねられていたからである。出席者のひとりで「合唱評論者」と称する山口隆俊[19]によると、座談会の議題は「放送番組に於ける合唱音楽の位置」「合唱放送の方法に就いて」「連合大合唱団の編成及訓練の方法」で、オリンピックにむけて大合唱団をいかに組織し、運営するかを話し合うものであった。[20]出席者は、放送協会の会長と

業務局長の他はすべて合唱関係者で、大日本音楽協会理事の伊庭孝[21]と国民音楽協会理事長の小松耕輔[22]、そして合唱団数団体の代表者[23]と東京音楽学校教授の大塚淳[24]であった。その席上で決定された内容を山口ははっきりとは書いていないが、一般紙では、東京大会ではベルリン大会の五倍の一万人の合唱団を目標とし、まずはその核となるべき千人の合唱団を既存のアマチュア合唱団によって組織することなどが決定された、と報じられている[25]。

この座談会に出席した合唱団の多くは、国民音楽協会と大日本音楽協会による合唱競演会に頻繁に参加、かつ入賞しているし、競演会には出場していない団体でも、主宰は当時よく知られていた指揮者である。つまり、この座談会はそれまでの国民音楽協会を中心とする合唱運動の流れにのっとって、日本放送協会がその組織化の可能性をさぐったものだったのである。

ところが、その席で話し合われた計画が具体化しないうちに、日本演奏家聯盟によって大日本聯合合唱団が発足してしまったのである。慌てた大日本音楽協会と国民音楽協会は、改めて十六日に会合を開いた。招かれたのは十の合唱団の代表者で、その中には、すでに大日本聯合合唱団に参加している団体も含まれていた[26]。

この会合において、新たに組織される団体の名称は「全日本合唱団聯盟」と定められ、聯盟に参加する合唱団は二十四団体と見込まれた。そして、日本放送協会の指示でラジオ放送のための演奏をするかわりに、運営費の補助を得ることなどが決められた[27]。さらに、放送協会から合唱運動の組織化を最初に任されたという自負のある大日本音楽協会は、聯合合唱団の参加団体に対し、大日本聯合合唱団を解散して聯盟に合流することを求め、一応の了承をとりつけた。しかし、最終的には大日本聯合合唱団側がそれを断ったため、合唱運動の組織化は最初からつまずく形となってしまったのである[28]。

この騒動には合唱団間の対立という面ももちろんあるが、それ以上に、それぞれの背後にいる大日本音楽協会と日本演奏家聯盟の対立を色濃く反映していたようである。[29] また、前述のように、全日本合唱団聯盟は放送局との結びつきによって加盟合唱団に経済的援助を行うことになっていたが、それを理由に母体の大日本音楽協会が各合唱団を統制しようとしたので、大日本聯合合唱団がそれに反発したようである。

その意味で、トップにいる人間の政治力が、多くの人間と運営費が動く合唱団の組織化を左右し、合唱界は分裂した、という細川周平の指摘はまったく正しい。ただでさえオリンピックに対する人々の関心が高いうえに、このようなスキャンダラスな側面があったので、この騒動は音楽雑誌だけでなく、一般紙でも取り上げられた。

対立解消

しかし、この混乱は三ヵ月後に突然収拾された。同年十二月二十八日、国民音楽協会と大日本聯合合唱団の合併が発表されたのである。前述のように、国民音楽協会は全日本合唱団聯盟を組織した側であり、大日本聯合合唱団とは対立関係にあったため、この合併は人々を驚かせた。経済的援助を盾に影響力をもとうとする大日本音楽協会に反発したことからもわかるように、大日本聯合合唱団は自立的な活動を目指しており、設立当初から生みの親である日本演奏家聯盟からも自由な立場であることを表明していた。そのため、日本演奏家聯盟ではこの合併に不信感をもつ者もあった。

この合併の結果、国民音楽協会は大日本聯合合唱団と全日本合唱団聯盟の双方を組織に組み込むべく、機構を改めた。[30] その結果、大日本聯合合唱団は協会の加盟団体による演奏団体と位置付けられ、当面の目標はオリンピック

におきながら、経常的な活動をすることになった。一方、全日本合唱団聯盟は全国規模の連絡機関とされた。この合併が国民音楽協会にもたらした影響については、本論の範囲ではないので稿を改めるが[31]、合唱競演会を開催することで合唱運動に貢献してきた国民音楽協会がこのように混乱を収め、改めて合唱運動の中心になったことは楽壇からは歓迎されたようである。ともかくこの合併によって、オリンピックにむけての大合唱団は、大日本聯合合唱団に統一されたのであった。

二　合唱人たちの思惑

合唱運動の組織化の動きはまだ続くのだが、この時点までに合唱関係者たちはたくさんの発言を残しているので、ここでそれらをみておきたい。すでにみたように、合唱運動を組織する側はそれにともなう利権をめぐって争い、組織される側はそれに従ったり、反発したりしていた。しかしそもそも、組織される側、つまりオリンピック以前から合唱運動に携わっていた人々は、東京オリンピックを契機に合唱に注目が集まったことにたいして、どのような反応を見せていたのだろうか。というのも、彼らにとって、国を挙げての合唱奨励は、まさに理想的な状況のはずだからである。

合唱運動の厳しい現実

ではまず、合唱指揮者の津川主一[32]の発言をみてみたい。

今度の東京オリムピアードのやうな機会に、純芸術的な合唱音楽祭を挙行して、合唱日本の芸術的水準を示したいものであるが、先づこれは日本の合唱音楽の実情に照して望めないことゝ思ふ。[33]

津川は当時名を知られた合唱指揮者であり、合唱競演会の審査員もたびたび務めていた。日本の合唱音楽は芸術的水準を示すような段階にはない、と彼は言うが、その実情はどのようなものだったのだろうか。続いて、塩入亀輔[34]の発言をみてみよう。

単にユニゾンで、合さつた声の汚いのもかまわなければ千人の合唱位各音楽学校生徒や各合唱団を集めれば出来るかも知れないが、それでは通らないオリムピック大会だ。スタヂアムに響き亘る美しい声を出す為めには現状は余りにも貧弱だ。[35]

オリンピックで必要とされるのは、芸術的で美しい合唱である。もちろん国の体面上、ユニゾン（斉唱）など以ての外である。しかし、塩入と同じく小松平五郎[36]も「此の大東京にほんとうの意味でコーラスを歌へる人々が一万人はともかくとして五千人否一千人でさへ集るであらうか[37]」と疑問を呈した。彼の言う「ほんとうの意味」でのコーラスとは混声四部合唱のことだが、何千人という規模で完璧な混声合唱をすることは、実情を知る関係者たちにとっては夢のまた夢だったのである。

オリンピックを契機とする大合唱とは別に、この頃すでに千人規模の合唱は試みられていた。それは「音楽週間[38]」で主に女学生によって行われていたものだが、伊庭孝によればそれは「単に人間が列んだといふだけで、合唱

として性能を発揮して居りません」[39]という程度の代物で、やはり理想とはほど遠かった。

これらの文章が書かれた時点では、騒動はまだ本格化していなかったかもしれないが、これらはすべて何らかの形で合唱運動の現場にいた人々にいた人物によってなされた発言である。彼らは、合唱運動の現実を厳しく認識していた。では、四年後のオリンピックを成功させるためには、どうしなければならないのか。まず小規模の完璧な合唱団を作り、それを拡大するなど、具体的な提案もなされたが、興味深いのは次の意見である。牛山充[40]によれば、当時合唱はそれなりに普及しつつあるとはいえ、まだ一般的ではなく、国民に理解されていなかった。

> 四年後にオリムピック競技が東京に来ることは確定して居ります。これに優秀な合唱団の必要なことも改めて申す迄もありません。私共は音楽日本の名誉にかけても欧米先進国のオリムピックゲーム合唱団に比し甚だしい遜色を見せないものを造り上げる義務を負はされて居ります。併し、此重大な任務を完全に果たすには官民共にもつと合唱といふものを理解し、その重要性に目ざめて来なければなりません。日本体育協会は申すに及ばず、内務省と文部省のこれに関係する当路者（ママ）。それに東京市がもつと関心を有つて、音楽上のことについては適当なる其機構に助言を求め、今より準備に着手し、四年後に於いて充分なる成果を挙げるやう画策しなければなりません。それには国民一般の間に合唱運動を起すことが何よりも大切です。[41]

合唱へのまなざしの変化

ここで確認しておかなければならないのは、合唱が当時どのような位置付けにあったかである。山口隆俊は、先

に紹介した日本放送協会主催の座談会の模様を報告した記事で、次のように書いていた。

> 兎に角世の中は変つたものだ。合唱者といへばフンと冷笑されたのに、放送局最高幹部の方達の出席を得て、合唱発展策を座談せよと招待を受けたのだ。(42)

ここから読み取れるのは、合唱や合唱をする人々にそそがれていた冷たいまなざしの存在である。何と比して合唱が「冷笑」の対象となっていたのか、山口ははっきりとは書いておらず、同様の発言をする関係者たちもやはり比較対象をあげていない。(43) したがって、あくまで推測するしかないのだが、例えばここまで引用してきた音楽雑誌の目次を見てみると、オリンピック招致決定以前の合唱関係記事としては、演奏会情報がときどき掲載されているぐらいで、論文は驚くほど少ない。つまり、いわゆる「西洋芸術音楽」を主な対象とする音楽雑誌において、合唱は取り上げられるべきテーマではなかったのである。このことは、楽壇とそれを取り巻く音楽愛好家たちにとって、合唱がさほど重要ではなかったことを示していよう。

といっても、洋楽導入の最初期から、洋楽における合唱の位置付けが低かったわけではない。明治期には、単旋律を主とする日本の音楽よりも、多声性と和声をもつ西洋音楽のほうが「高級」であると考えられており、その価値観においては当然、合唱も「高級」なものとみなされていた。当時の演奏会批評を調べると、規模の大きな合唱作品（例えば、シューマンの《流浪の民》）が取り上げられたときに、演奏の良し悪しはもちろんだが、ともかくも演奏できるという事実そのものが、その演奏団体を評価する材料となっていたことが分かる。(44) それがいつ頃から変わってきたのか、筆者はまだはっきりとした結論には至っていないのだが、おそらくは、洋楽が裾野を広げていっ

た大正年間ではなかっただろうか。

昭和初期、合唱はすでに楽壇においては傍流となっていた。その意味では、一般社会のみならず、楽壇も合唱への理解が足りないということになろう。それが突然、東京大会の開催決定をさかいに、オリンピックに不可欠なものとして重要視されはじめたのである。この急激な変化において、山口隆俊の次の指摘は興味深い。

> 然し是は合唱音楽が認められたのでは勿論なく、世界オリムピツク東京大会に合唱が是非必要なので此国家的世界的大祝祭に国家の恥とならぬ様との放送局当局の尊い配慮に出た事は勿論であらう。(45)

合唱音楽が重要視されるようになったからといって、従来日本で展開されてきた合唱運動が認められたわけではなかった。ただ、大人数を動員できるという点で、合唱の形態が求められているにすぎなかったのである。しかしそうではあっても、合唱の普及のために活動してきた人々にとっては、次に示すように、これはまさに願ってもないチャンスだったに違いない。

> たゞ僕たちが愉快に思ふことは、今まで合唱なんて、低能児が集つてやる位のものにしか考へられてゐなかつたことが、このオリムピアードを期として、社会の表通りへ打つて出ることが出来ることである。(46)

合唱関係者たちにとって、合唱の普及は切なる願いである。合唱競演会が開催されるようになったのも、コンクールという形式を通して、合唱の普及とその水準の向上を図るためであった。しかし、そのような合唱界の内部からの動きだけでは、どうしても限界がある。なぜならそれは、堀内敬三がいみじくも指摘しているように、どうし

ても「歌ふ人々の趣味にのみ依存」せざるを得ないからである。(47) その限界を打ち破り、合唱運動に社会的な意味を持たせたのが、東京オリンピックであった。

こうしてみてくると、オリンピックを成功させるためには、合唱の技術的なレベルを上げていかねばならないという合唱関係者たちの強い危機感は、合唱運動の普及と地位向上への希望とつながっていたことが分かる。果たして彼らの願いは、叶えられたのだろうか。

三　組織化の結末

大日本聯合合唱団への批判

組織化の最初の段階から分裂した合唱界が一九三六（昭和十一）年の年末に統一され、オリンピックを目標とした大合唱団が「大日本聯合合唱団」に一本化されたことは前述の通りである。この大合唱団は国民音楽協会の下部組織であるから、その活動は当然国民音楽協会の指示で行われていた。具体的には、明治節など祝日大祭日における奉納演奏とラジオでの演奏などで、特に後者の頻度が高かった。この点について、山口隆俊は次のように怒っている。

> オリムピツクを契機として合唱問題は一歩前進したかに見え、国民音楽協会も是が責任者として立つたかに見えた。然し遠慮なく云はしむれば其現状は否と断ぜざるを得ない。同協会改組以来既に三年、其業績は斯る合唱芸術大衆化民族化に対して一指も染め得てゐないのが現状である。過去三年間の事業は殆んど聯合合唱団と

放送局との収入交渉に基く放送問題のみと云つて良い。……現在国協の中心である聯合合唱団の三年間に前進した所は、合唱国民運動と掛け離れた職業合唱団設立運動に近く……[48]

大日本聯合合唱団は放送局の仕事を引き受けることで、職業合唱団すなわちプロの合唱団としての性格を強く持つようになった。ラジオ出演は、国民音楽協会が聯合合唱団を合併したときから決められていたこととはいえ、それは果たしてオリンピックにむけての準備といえるのか。また、聯合合唱団の出演料を経済基盤としているために、その金額の交渉ばかりしている国民音楽協会は、本来の仕事である合唱運動の普及には何の努力もしていない、というのである。山口はかねてから、日本においても合唱を民族運動といえるものにしたいと主張していたから、その憤りはよけいに強かったかもしれない。実際この時期に、国民音楽協会や大日本聯合合唱団によって開催された講習会などは確認できない。[49]

「大日本合唱団」の誕生とさらなる分裂

そんな中、一九三八（昭和十三）年六月、新たに「大日本合唱団」なる団体が結成された。この合唱団の目的は「我が楽壇を大同団結して紀元二千六百年記念祝典と東京オリンピック大会を機会に我国の文化を全世界に誇示し前記の国家的事業を音楽によつて彩らんとする」[50]ことだったので、同じ目的をもつ大日本聯合合唱団との衝突が懸念された。

大日本合唱団設立の中心となったのは、大日本体育芸術協会であった。そのため、大日本合唱団の役員には音楽家のほか、オリンピック組織委員会の事務総長も名を連ねている。[51]目指す団員数は三千人だったが、入団資格を「官

公私立音楽学校卒業ならびに同程度のもの」と規定していたことから、単に数を競うだけでなく、音楽的な充実を図ろうとしていたようである。音楽の専門教育を受けていない、一般の応募者には『コールユーブンゲン』を課題曲とする試験が課せられ、当時第一線で活躍していた声楽家が審査員を務めた。[52]

しかし、団員募集は円滑には進まなかった。一般応募者を対象とした第一回試験（六月十二日）の結果、三二六人の入団が認められたが、実際に試験を受けた応募者はたった十人にすぎず、[53]入団者のほとんどは音楽学校出身者と大日本聯合合唱団の団員であった。これは大日本聯合合唱団と大日本合唱団がオリンピックに向けて協力することを決めた結果で、両団の対立は回避されたが、大日本合唱団のこの醜態には「可成りの認識不足がある」と非難の声が上がった。[54]

『東京朝日新聞』には入団者の中から注目を集めそうな人物を紹介する「三千人の合唱異色風景」というコーナーが設けられ、[55]この合唱団の存在がアピールされたが、その連載中の七月十五日、政府はオリンピック返上を閣議決定した。連載の第二回（十五日）には、「オリンピック東京大会は返上中止と決定したが、二年後の二千六百年祝典その他の国家的祭典には、かうした大合唱団はどうしても必要なので、解散せずに練習を続けて行く方針である」と書き添えられている。大日本合唱団の主張によれば、同団は「芸術的な合唱音楽の振興、向上、普及が最終の目的であつて、オリンピックはたゞさういふ運動の主体を作るもつとも適当の機会として摑まれたに過ぎない」[56]ということだったが、これでは国民音楽協会の傘下にある大日本聯合合唱団と目的が重なるため、対立は避けられない。そのため、大日本聯合合唱団は大日本合唱団を脱退することになり、合唱界は再び分裂したのである。

この時期の音楽雑誌では、この事件に関する記事が多数散見される。[57]その主な内容は、大日本聯合合唱団（国民

音楽協会）と大日本合唱団双方への批判と擁護、オリンピックに向かっての合唱運動を利権と権力をめぐる争いの場にしてしまった人々への非難である。だが、同時にこれらの記事の大半は、著者がふたつの合唱団のどちらを支持しているかに関わらず、その後の合唱運動の行く末を案じている。東京オリンピックによって合唱運動が注目を集めはじめたときから、それがオリンピックという外因によってもたらされた隆盛であるために、東京大会終了後の合唱運動の行く末を懸念する声はあった[58]。その不安はオリンピックの返上と戦争の激化によって、現実のものとなりつつあったのである。

分裂した後、ふたつの合唱団はどうなったのだろうか。大日本合唱団はその年の年末、ローゼンシュトック指揮の新交響楽団によるベートーヴェンの《第九》の演奏に参加している。しかし、その後の活動は定かでない。一方の大日本聯合合唱団は国民音楽協会の下部組織としてしばらくは活動を続けたが、それも戦争激化のためか、一九四三年以降は確認できない。

四　国民皆唱という理想への布石

ここまで、東京オリンピック招致決定に端を発した合唱運動の組織化の過程を追ってきた。組織化自体は、失敗に終わったと言わざるを得ないが、その後合唱運動が衰退してしまったわけではない。

オリンピック返上後、戦争が激化していく中で、合唱運動は「厚生音楽」という新たな脈絡で社会の表舞台にとどまり続けることになった。その一環として一九四〇年台に展開された「国民皆唱運動」では、音楽家が日本各地へと出向いて歌唱指導を行い、人々は声を合わせて歌った。その音楽は必ずしも「合唱」ではなかったし、その多

くは「芸術的」とも言い難いものであった。しかし、昭和戦前期を経験した合唱関係者たちは、戦後、一九六十年前後に合唱がブームといえるほど盛んになったとき、戦時中に国中が声をそろえて歌ったその記憶がブームの伏線となったのだ、と振り返っている。[59] 長木誠司は、それが合唱関係者たちの実感を伴った事実であり、国民皆唱運動という思想は単に戦時中の一時代に限ったことではなく、多くの合唱人に共有される理想郷への思いである、と指摘している。[60] だが、関係者たちは、その直前の東京オリンピックについては、何も語ろうとしていない。

それは、東京オリンピックが返上され、合唱運動の組織化も失敗に終わってしまったからだろう。しかし、この一連の出来事の意義は、その結果とは別のところで認められるべきである。たしかに東京オリンピックは、表面的には合唱運動に混乱をもたらしたに過ぎない。しかしその一方で、合唱関係者たちはオリンピックを機会に、合唱運動の普及を目指した。それは、東京オリンピックがそれまで軽視されていた合唱の地位を引き上げ、はじめて社会的な意味を与えたからである。戦後の合唱ブームにとって、戦時下で人々に刻み込まれた歌うことの記憶は確かに重要であるが、しかしその前段階では、東京オリンピックが人々の目を合唱に向けさせ、下地を準備していたのである。当時、日本の合唱史はまだ百年にも満たない短さではあったが、その短い歴史において、幻の東京オリンピックは大きな転換点となったのである。

註

＊本稿では、旧字体はすべて新字体に改めた。なお、カタカナ表記の合唱団名には、もっとも標準的と思われる表記に改めたものがある。

（1）本論文は、待兼山芸術学会第十五回研究発表会（二〇〇五年四月九日、大阪大学）での発表の一部を加筆修正し

たものである。

(2) 中村哲夫「第十二回オリンピック東京大会研究序説」『三重大学教育学部研究紀要』人文・社会科学、I、第三十六巻（一九八五年）、一〇一～一一二頁。II、第四十巻（一九八九年）、一二九～一三八頁。III、第四十四巻（一九九三年）、六十七～七十九頁。

(3) 橋本一夫『幻の東京オリンピック』日本放送協会、一九九四年。

(4) 第一回は「合唱音楽祭」の名称で、一九二七年十一月二十八日に開催された。以後、毎年開催されて一九四二年まで続いたが、一九四三年からは戦争の激化を理由に中止された。主催は国民音楽協会（一九二七年創立、理事長・小松耕輔）。同協会はこのコンクールの開催によって、戦前の合唱運動を牽引する役割を果たした。

(5) 一九四〇年台に展開された運動で、歌うことで士気高揚を図った。本論第四章を参照。

(6) 例えば、秋山日出夫は昭和戦前期の状況について、一九三七年に「大日本聯合合唱団」ができたこと（正しくは再編、本論第一章参照）は述べているものの、これと東京オリンピックとの関係についてはまったく触れていない（「日本の合唱百年史(三)　昭和期より終戦まで」『合唱サークル』一九六七年九月号、六十六～六十九頁）。

(7) 細川周平「日本の藝能一〇〇年（一四三）　西洋音楽の日本化・大衆化五十五　合唱」『ミュージック・マガジン』一九九三年十月号、一三〇～一三五頁。

(8) 同前。

(9) 「オリンピック応募作曲力作三十二点集る」『音楽新聞』一九三六年二月下旬号、三頁。

(10) 一九三一年創立。スポーツに関する芸術文化活動を通して、スポーツの発展に寄与することを目的とした。現日本スポーツ芸術協会。

(11) 「オリンピック音楽座談会」『音楽評論』一九三六年十月号、十五～三十頁。出席者は大木正夫、信時潔、鯨井孝、山根銀二、二見孝平、小森宗太郎、秋吉元作、清瀬保二、日比野愛次、諸井三郎。

(12) 一九三六年四月結成。著作権をめぐるいわゆる「プラーゲ問題」に対し、何の対策もとれなかった大日本音楽協会に反発した演奏家たちが、自分たちの利益・生活を守るために団結したもの。

(13) 大日本聯合合唱団結成の日付や、結成時の団体数に関しては、メディアによって情報がまちまちである。各記事を検討した結果、ここでは九月九日結成、十二団体と判断した。参加団体は、ヴォーカル・フォア合唱団、ルナ・オリオンコール、東京シンフォニック・コーラス、東京オラトリオ協会、コーロ・エコー、東京合唱クラブ、ユーフォニック・コーラス、東京リーダーターフェル・フェライン、ホワイト合唱団、靈南坂合唱団、三陽会合唱団、東京混声合唱団（「大日本聯合合唱団成立」『音楽新聞』一九三六年九月下旬号、二頁）。

(14) 「楽壇社会面」『音楽世界』一九三六年十月号、八十九頁。宣言文は未見である。

(15) 「大合唱団成る」『読売新聞』一九三六年九月十日朝刊。

(16) 一九三二年、「東京音楽協会」として設立。音楽の向上振興を目的とする。第六回合唱競演会から協賛団体として、合唱運動とかかわりを持つ。「大日本音楽協会」と名称を変更するのは一九三六年十月で、この時点ではまだ「東京音楽協会」なのだが、本稿では混乱を避けるため「大日本音楽協会」で統一した。

(17) 註(4)参照。

(18) この日付も、メディアによって異なる。ここでは翌日の一般紙朝刊による報道に従った。

(19) 山口隆俊（一八九九～?） 同志社グリークラブで指揮者を務め、卒業後一九二六年に男声合唱団「東京リーダーターフェル・フェライン」を設立、指揮者を務めたが、一九三三年以降は指揮者を辞めて合唱評論に専念したらしい。

(20) 山口隆俊「伯林オリムピックの音楽と東京オリムピックへの考察」『音楽世界』一九三六年十月号、十～二十一頁。

(21) 伊庭孝（一八八七～一九三七） 佐々紅華らと浅草オペラを築き上げた後、音楽評論、ラジオの放送オペラ、日本音楽研究などに関わった。

(22) 小松耕輔（一八八四～一九六六） 作曲家、音楽教育家。一九〇六年、東京音楽学校卒業。合唱競演会は、彼のフランス留学（一九二〇～二二年）中の経験をもとに計画された。

(23) 『読売新聞』（九月八日朝刊）によると、以下の通り（括弧は代表者名、表記は一部改めた）。ルナ・オリオンコール（吉田永靖）、東京リーダーターフェル・フェライン（山口隆俊）、東京シンフォニック・コーラス（津川主一）、

ヴォーカル・フォア合唱団（内田栄一）、ホワイト合唱団（谷口露子）。ただし、山口隆俊はこのときにはすでに合唱団を退団している（註(19)参照）。

(24) 大塚淳（一八八六～一九四六）　ヴァイオリニスト。一九〇八年、東京音楽学校卒業。

(25) 「大合唱団成る」『読売新聞』一九三六年九月八日朝刊。

(26) 『音楽新聞』（一九三六年十月上旬号）によると、出席した団体は、ルナ・オリオンコール、ヴォーカル・フォア合唱団、東京シンフォニック・コーラス、東京混声合唱団、コーロ・エコー、ホワイト合唱団、ユーフォニック・コーラス、自由学園、玉川学園合唱団、ECクラブ（府立第三高女）。

(27) 「四年後のオリンピックに備へ全日本合唱聯盟成立」『音楽新聞』一九三六年九月下旬号、二頁。この記事によれば、参加数二十四の内訳は、過去の合唱競演会入賞団体から十五、十校の音楽学校生徒からなる学校別合唱団六、その他優秀な団体三となっている。ただし、実際に聯盟に加盟した団体数やその名称などは不明である。

(28) 「時事解説　合唱団統一問題の紛糾に就て」『音楽新聞』一九三六年十月上旬号、二～三頁。以下の記述も、これによっている。

(29) 大日本音楽協会と日本演奏家聯盟の対立については、註(12)を参照。

(30) 「合唱音楽の中心機構たる国民音楽協会の誕生」『楽苑』一九三七年二月号、四頁。及び『国民音楽協会定款』（一九三八年一月制定、全日本合唱連盟附属合唱センター所蔵）。

(31) 創立当初、国民音楽協会は「作曲奨励」など西洋音楽全般にかかわる事業を掲げていたが、この改組後、合唱運動以外の事業は大日本音楽協会に引き継がれたらしい（「合唱団問題一段落か」『音楽新聞』一九三七年一月下旬号、二頁）。

(32) 津川主一（一八九六～一九七一）　牧師の長男として生まれ、一九二一年関西学院神学校卒業。在学中、関西学院グリークラブに所属。卒業後も牧師としての活動の傍ら、合唱指揮者としてキリスト教音楽の演奏に取り組んだ。讃美歌やフォスター作品をはじめとする、たくさんの訳詩でも知られている。

(33) 津川主一「オリムピアードの合唱団」『音楽世界』一九三六年十月号、二十二～二十四頁。

(34) 塩入亀輔（一九〇〇～一九三八） 音楽評論家、音楽ジャーナリスト。読売新聞社記者を経て、新交響楽団機関誌『フィルハーモニー』、雑誌『音楽世界』の主筆となった。一九三六年当時は、国民音楽協会理事、合唱競演会審査員を務めている。

(35) 塩入亀輔「オリンピックの音楽対策」『音楽世界』一九三六年九月号、五十一～五十四頁。

(36) 小松平五郎（一八九七～一九五三） 指揮者、作曲家。小松耕輔の弟。帝国美術学校、日本大学芸術科で教鞭をとった。

(37) 小松平五郎「オリンピックの一万人合唱団について」『音楽世界』一九三六年十月号、二十六～二十八頁。

(38) 日本教育音楽協会主催のイベント。オリンピック招致決定後は、三万人や五万人の合唱も試みている。

(39) 伊庭孝「来る可きオリンピックに備へて」『音楽世界』、一九三六年九月号、四十七～四十九頁。

(40) 牛山充（一八八四～一九六三） 音楽・舞踊評論家。一九一三年に東京音楽学校甲種師範科を卒業し、同校や日本大学芸術科で講師を勤めた。一九二五～一九三四年、『東京朝日新聞』嘱託として音楽・舞踊批評を執筆。

(41) 牛山充「生活に即した合唱」『楽苑』一九三六年十一月号、三～四頁。

(42) 山口、前掲。

(43) 後述の津川主一の発言（註(46)）を参照。

(44) 「十番の合唱薩摩潟が本会に出るようになつたのは一つに本会の隆盛になれると、他に大阪、奈良、大津より諸先生の御援助ありたることゝを証明するものである」（M生「京都音楽会第十二回演奏会を聴く」『音楽世界』一九〇八年七月号、十～十一頁）。当時《流浪の民》は、西郷隆盛と僧月照の入水事件を題材とした《薩摩潟》という創作歌詞（鳥居忱作歌）で歌われていた。この演奏会は二部制で、《薩摩潟》は第一部の最後に演奏され、他にヴァイオリンやピアノの独奏、合奏、唱歌などがあった。

(45) 山口、前掲。

(46) 津川、前掲。

(47) 堀内敬三「日本の合唱運動は何であつたか」『音楽評論』一九四〇年十月号、十八～二十一頁。

(48) 山口隆俊「音楽国策と合唱問題――激流・世紀の動き――」『音楽世界』一九三八年五月号、二十六～三十一頁。
(49) 一九四二年に「合唱指導者講習会」が開催されたことは確認できている。
(50) 「大日本合唱団創立総会開く」『東京朝日新聞』一九三八年六月二日朝刊。
(51) 創立委員長は渋沢秀雄（大日本体育芸術協会副会長）、顧問は永井松三（オリンピック組織委員会事務総長）、山川健（文部省専門学務局長）、徳川義親、徳川頼貞、乗杉嘉寿（東京音楽学校長）、山田耕筰、近衛秀麿、田村虎蔵、鈴木米次郎、小松耕輔など。技術委員には、矢田部勁吉、柳兼子、外山国彦など（『音楽新聞』一九三八年六月下旬号、四頁）。
(52) 長門美保、奥田良三、立松房子、三浦環、関鑑子など約四十名（同前）。
(53) 「三千人公募の具体化――オリムピック合唱団」『音楽新聞』一九三八年六月下旬号、四頁。
(54) 「アラベスク」『音楽新聞』一九三八年六月下旬号、一頁。著者はどの点が認識不足であるのかは書いていないが、おそらく、合唱運動の組織化のそれまでの過程を無視していることだと思われる。
(55) 一九三八年七月十四～十六日朝刊で連載。
(56) 一条重美「音楽時評――近事二つ」『音楽評論』一九三八年九月号、五十六～五十八頁。
(57) 引用文献以外に、以下のものがある。「アラベスク」『音楽新聞』一九三八年八月上旬号、一頁。「音楽万華鏡」『音楽世界』一九三八年九月号、七十八頁。「今楽季の回顧」『音楽評論』一九三八年七月号、三十五～四十一頁。園部三郎「音楽時評――オリムピック中止と日本合唱団の将来」『音楽評論』一九三八年八月号、五十四～五十五頁など。
(58) 山口隆俊「東京オリムピック辞退と合唱運動のピンチ」『音楽世界』一九三八年九月号、八十～八十三頁。
(59) 秋山日出夫他「座談会　日本の合唱団のこれからの方向」『合唱サークル』一九六六年一月号、十四～十九頁。
(60) 長木誠司「〝運動〟としての戦後音楽史一九四五～　七　合唱運動Ⅱ」『レコード芸術』二〇〇四年七月号、一〇四～一〇八頁。

（大学院博士後期課程）

SUMMARY

The Significance and Role of the 12th Olympics in the History of the Choral Movement in Japan

Atsuko YAMAGUCHI

Little research has been conducted on the choral movement in Japan; its history has been discussed mainly by people who were actually involved in the movement. According to their reports, the Choral Competition, which began in 1927 and "the All Sing Movement," which developed after around 1940, were important for the choral movement in the prewar Showa Era (1927-1945). Their accounts revealed that the latter, in particular, made the people realize that singing in chorus was enjoyable. Consequently, in around 1960, Japan witnessed the choir boom. However, these accounts have almost disregarded the affair, surrounding the 12th Olympics that were scheduled to be held in Tokyo in 1940.

In 1936, the decision to hold the Tokyo Olympics was taken. Following this, great importance was attached to choral music in order to show the world that excellent Western music could also be found in Japan. Consequently, a number of small choirs were organized into large ones. However, there was a split in the choral movement due to the conflict between some music associations over who would take charge and organize this movement. This conflict continued even after the Olympics were cancelled in 1938. While those involved in the affair later disregarded it due to its scandalous nature, they had welcomed the Olympics at that time because of the enhanced importance attached to the choir, which was not popular yet.

This paper first aims to describe the situation surrounding the choral movement during the two years between the decision to hold the Tokyo Olympics and the decision to cancel them. Next, it analyzes the reports of the people concerned in order to examine how the social meaning of the choral movement was transformed by the affair. These points have led me to regard the Tokyo Olympics as an important turning point in the choral movement in Japan.

キーワード：東京オリンピック，大合唱団，合唱運動の組織化